

ゆっくりでも伝えたい

白河市立白河中央中学校 3年 車田 紗羽

みなさんは、吃音症という障害を知っていますか。聞いたことはあってもどんなものなのかを理解していない人が多いと思います。吃音症とは、話すときに言葉がつまったり、同じ言葉を繰り返したり、引き伸ばしたりする発話障害です。この障害の最も辛いところは、まわりの人に理解されにくいことです。吃音症は、努力すればすぐに治るようなものではありません。でも、私は少しでもみんなと同じように話せるようになりたかったので逃げずに立ち向かいました。

私は、小さいころから吃音症がありました。小さいころは、気にしていなかったけれど、成長していく内にみんなと違うことに気がきました。症状のピークは、小学四年生のころです。このころは、「おはようございます」「いただきます」などの短く簡単な言葉も言えませんでした。毎日必ず言う言葉が言えない毎日は、とても辛かったです。毎朝起きると、ゆううつな気持ちになって学校に行きたくないと思うようになっていました。特に嫌な日は、日直の日です。なぜなら、日直は朝の会で最近の出来事を発表する三分間スピーチがあったからです。そのため、前日になるべく話しやすい言葉でスピーチを考えていました。学校につくと、不安と緊張で押しつぶされそうになりました。けど、いいチャンスだと思い「止まってもいいから頑張ろう。」と自分に言い聞かせました。でも、スピーチのときが来て深呼吸をし、一言目を言おうとしても言葉が出てこなかったのです。私は、みんなの視線が怖くて焦り、涙が出てきました。あらかじめポケットに入れておいたハンカチで涙をふき冷静さを取り戻すのに必死でした。このスピーチがきっかけで私はクラスの友達に「話し方が変」と陰口を言われるようになりました。また、私の話し方をまねしてばかりにしている人もいました。私は、悔しくてたまりませんでした。それから、人前で話すことが怖くなり、授業中に手を上げなくなってしまいました。そんなある日、担任の先生に「みんなにこのこと伝えてみない。」と聞かれ「理解してもらえるかも」と思い伝えてもらうことにしました。そのおかげで、みんな私が話し始めるまで待ってくれたり「ゆっくりでいいよ」と優しい言葉を言ってくれるようになりました。仲の良い親友もできてとてもうれしかったです。私を救ってくれた先生には、とても感謝しています。

小学五年生になり、生活委員会に入れるようになりました。何に入ろうか迷っているとき、ふと放送員に目が止まりました。放送員はマイクに向かって話しますが人前で話すことと一緒に私は感じます。私は、今まで人前で話すことから逃げていました。で

も、逃げてばかりじゃ変われないと思い勇気を出して放送員に入りました。しかし、そう簡単にスムーズに話せるようにはなりません。最初の言葉が出なかったり、途中で止まってしまったりすることがありました。でも、友達が変わりに言ってくれて時間通りに放送することができました。そして、始めのころはスムーズに言えなかった言葉もだんだん言えるようになってきました。友達と話すときもすらすら話せるようになり発表も積極的にするようになりました。こんなに話せるようになった一番の理由は、まわりの人たちの支えがあったからだと思います。みんなを変えてくれた担任の先生、優しく声をかけ仲良くしてくれた友達、そしてなにより一番近くで支えてくれたお母さんの支えがなかったら私は変われなかったと思います。本当に感謝しています。今では、ほとんど吃音症の症状は出ていません。あの時、勇気を出して放送員に入って良かったと心から思っています。

このように、私は吃音症で苦しんだことがたくさんありますが、「逃げずに立ち向かうことの大切さ」を知ることができました。世の中には、いろいろな人がいます。人はみんな違って、それぞれに得意なことや苦手なことがあります。人と違うことをばかにするのは、その人の人権を否定することと同じです。見た目や話し方だけで人を決めつけるのではなく、その人の中身を見て、きちんと向き合うことが人権を守る第一歩だと感じました。吃音症は、見た目には分からないけれど、たしかに「生きづらさ」がある障がいです。だからこそ、まわりの人に理解してもらうことが大切だと思います。

「ゆっくりでいいから、自分の気持ちを伝える」ことを心がけて生活したいと思います。私は、もっとたくさんの人に吃音症について知ってほしいです。そして、人とちがっても、それを「ちがうままで大切にできる」ことができる社会になってほしいと思います。私は、どんな人でも、笑われたり、傷つけられたりせず、安心して生きていけること。それが「人権を大切にすること」ということだと強く思います。